

「四国電力50年史」より

年12月に設立した。

橘湾発電所の運転開始により、当社の石炭所要量は従来の2倍以上となった。調達については、豪州炭を中心とした長期契約により安定化を図ることとした。また、これまで以上に競争購入の比率を高め、低価格での調達に努めている。

輸送については、当社が積荷を保証する14万トン積載の石炭専航船「たちばな」が12年9月に就航した。これにより、輸送の安定性、効率性、経済性がより一層確保されることとなった。

■原子燃料

当社が伊方発電所1号機用原子燃料の調達を開始したのは、昭和40年代半ばである。このときから現在まで約30年間の原子燃料の調達は、原子燃料サイクルのほとんどすべてを海外に依存していたため、世界の政治・経済情勢や原子力政策の変化に大きく左右されてきた。

この間、当社の調達活動は変遷をたどり、量的確保のみに奔走した初期の時代から、海外ウラン鉱山の開発輸入による長期安定確保の時代を経て、

原子燃料確保のために

「レジオン・ドヌールと私」(山口恒則、昭和61年) から

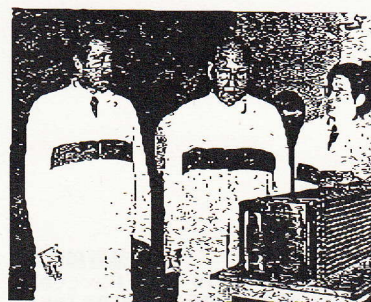
昭和45年3月に伊方1号機の最初の燃料として、わが国の電力会社で初めて、対仏天然ウランの売買契約に調印した。この契約は供給者が仏原子力庁で信頼性が高く、価格、支払い条件(延べ払い)ともに、当社にとって有利なオファーであった。当時、日本の他の電力会社は、カナダからポンド当たり8~9ドル程度の価格で購入していたが、当社の場合、仏と7ドルで契約できたと記憶している。とはいえ、他の電力会社に先駆けて、未知数の仏から天然ウランの購入を決断するに至るまで、私なりにいろいろと勉強もし、迷い、悩みましたが、最終的には先に述べた理由のほか、天然ウランの安定確保、供給ソースの多様化に役立つと確信して契約に踏み切った。

おかげさまで、その後長期にわたる天然ウランの確保の一環として、仏のユラネックス社との間で、合計1,410トンの長期契

約を結ぶことができたし、また第1次石油ショックに伴いウランのスポット価格が高騰し、仏側より価格の見直し要請があったときにも、私自身渡仏して交渉に当たり、まずまずの価格で決着することができた。これらのことも、今となっては懐かしい思い出である。

ところで、伊方の建設を開始したころに再処理の技術を持っていたのは、英、仏2カ国のみであった。私はここでも仏と再処理契約を結ぶよう、私自身が仏政府と交渉し、伊方原子力の再処理を仏原子力庁との間で、契約書に署名した。当時9電力の社長会議でも、大勢がイギリスとの再処理委託契約を主張する意見が多いなかであって、英、仏2カ国との共同委託契約を結ぶことを提唱したのは私であった。その理由は、仏の原子燃料サイクル技術が世界一優秀であると信じたことによるが、英、仏2カ国

間に競争状況の確保を図る意味合いも多分にあった。その結果、日本の9電力会社と仏のコジエマ社の間では、52年9月に再処理契約および再処理施設融資契約が調印されることとなった。その後、今日に至るまで、わが国の電力会社と仏との間で、原子燃料サイクルの協力関係がうまくいっていることからみて、このときの私の判断は正しかったものと思われる。



フランスの原子燃料施設を視察する山口社長

わが国自前の原子燃料サイクルの確立に向けて確実に歩み始めるなど、多面的かつ自立的な安定確保が実現する時代が近づきつつある。

1. 原子燃料の調達に奔走（昭和40年代）

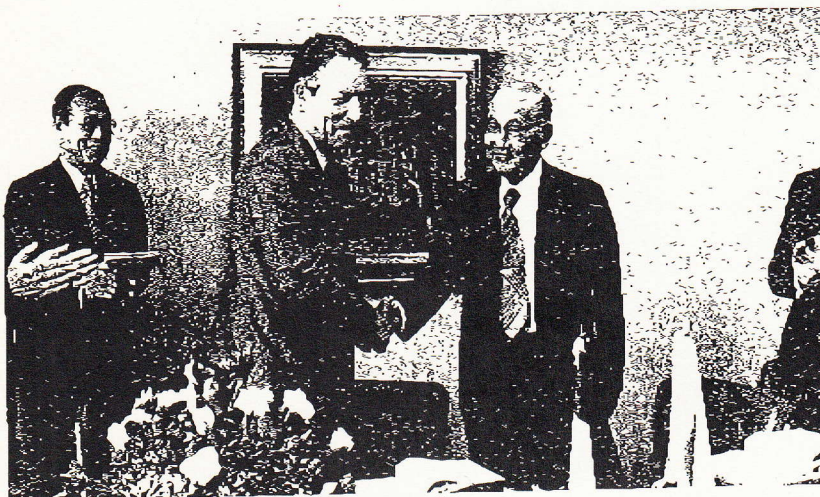
昭和40年代は、当社が伊方発電所1号機（52年9月運転開始）の初装荷と取替燃料の確保のため、世界的な原子力開発ブームによる売り手市場のなか、原子燃料調達に奔走した時期である。

（1）天然ウランの調達

天然ウランの調達については、まず、昭和45年3月にフランス原子力庁と、47年10月にオーストラリアのケイーンズランド・マインズ社（QM社）と、48年3月にはイギリスのRTZミネラルサービス社と契約を結んだ。特筆すべきことは、わが国の先行する電力会社がカナダ、アメリカ、南アフリカといった既存のウラン資源大国を供給ソースとしていたなかで、当社はウラン市場への新規参入者であったフランスとオーストラリアに着目したことである。当社が結んだ契約は、日本とフランス、日本とオーストラリア間の最初のウラン売買契約であるが、今日、わが国とフランスが原子燃料サイクル全般にわたって緊密な提携関係にあることや、オーストラリアに対してウラン供給の多くを依存していることを考えると、当社の供給ソースの選択が当を得たものであったことを物語っている。

（2）濃縮役務の調達

天然ウランについて、当社は*濃縮役務の調達に取り組んだ。アメリカ



ユーロディフ社との濃縮役務契約の締結（昭和48年6月）

※濃縮役務

天然ウランには、燃える（核分裂する）ウラン235が約0.7%含まれており、残りの99.3%はウラン238からなっている。軽水炉で利用するには、ウラン235の割合をおよそ3～5%に濃縮する必要があり、このための役務が濃縮役務。